論　説

高浜虚子の「熱帯季題」論と山本孕江の台湾季題観
――昭和期の台湾俳人は「熱帯季題」をどう見ていたか――

沈　美雪

はじめに
第1節　山本孕江と高浜虚子の交友関係
第2節　虚子の台湾来訪と「熱帯季題」
第3節　台湾における季の問題――「熱帯季題」構想前の台湾季題についての言及
第4節　昭和期の台湾俳人は「熱帯季題」をどう見ていたか
第5節　削除された「熱帯季題」、そして台湾の俳句歳時記
おわりに

（要約）
昭和期の台湾では、ホトトギス系のゆうかり社が台湾俳壇を牛耳っており、そして、必然的に高浜虚子を最高の指導者として仰いでいる。虚子は昭和11(1936)年に次男池内友次郎を訪問するために洋行し、その帰途に台湾に立ち寄った。しかしこの対面は台湾俳人の期待するような、収穫の多い内容ではなかった。本稿では、まず高浜虚子とゆうかり社の主宰である山本孕江との交流に注目し、この二人の関係が中央俳壇であるホトトギス対地方俳壇であるゆうかり社の関係性に読み換え可能であることを提起する。次に「熱帯季題」を巡る論争を考察し、特に「熱帯季題」「季」「歳時記」に対する台湾俳人の主張を第一次資料によって検証していく。最後に、台湾にとって「季」とは何かを、台北俳句会を例として、「台湾季語」で日本語俳句を詠み続けるというスタンスを紹介し、本論の結論の一つとしたい。

はじめに

俳句が台湾に伝わってから、既に100年以上が経過しているが、明治期においては、小林李坪（里平）らが結成した竹風吟壇が母体となり、俳誌『相思樹』を刊行している。そして、同誌は、日本の統治下にあった台湾において、最初に発行された本格的俳誌として、近代俳句史に新しい一頁を刻むものでもある[1]。なお、竹風吟檀とは、明治35（1902）年以来、『台湾民報』を中心に投句を続けていた俳人を中心に、正岡子規が提唱した俳句革新の理念に心酔した台湾の新派俳人が結成した結社である。そのため、後の台湾俳壇では、『相思樹』に属した明治期の俳人たちを「旧ホトトギス派」と称している。また、明治期の台湾俳壇における最大の研究成果と言えば、まず、小林李坪が明治43（1910）年に出版した『台湾歳時記』（政教社）を挙げるべきであろう。『台湾歳時記』は、一人の日本人によって編まれたという点はもちろんのこと、何よりも日本と異なる台湾の風土に立脚した季題解説文といった、その内容の独自性といった点において、重要性が感じられるものである[2]。また、昭和期のゆうかり社同人は、明治期に編まれたこの歳時記の存在を常に意識し、自分たちの手による新しい地方歳時記を世に送り出すことが、一つの使命のように思われていた。そして、こうした『台湾歳時記』の、海外俳句史における位置付けについて筑紫磐井（2000）は次のように述べている。

実はこの異国歳時記の持つ視点は、日本の〈近代歳時記〉が成立するに当たって極めて重要な役割を負っていることに気付かねばならない。これは次々回に語る虚子編『新歳時記』に再び登場する点で、今日、俳句や歳時記の国際化などといっている薄っぺらな問題とは違う、深い意味を持っていたのである。（中略）『臺灣歳時記』の執筆者小林理平（李平[3]）〔ママ、李坪が正しい〕は台湾在住の人らしいが経歴を詳らかにしない。この本刊行の当時は俳句界は碧梧桐が飛ぶ鳥を落とす勢いであり、この歳時記にも序文を執筆している。その中で「沖縄臺灣の如き風土の異なる地方の季題趣味問題は遂に俳句上の大問題である。」と率直に述べているのは碧梧桐の見識である。やがてこの問題は虚子にあって致命的な問題となって噴出する[4]。

上記の引用によれば、筑紫磐井は「近代歳時記」における『台湾歳時記』の歴史的意義を認め、さらに、碧梧桐が重要視した「地方の季題趣味問題」が、虚子にとって「致命的な問題」になったと指摘している。なお、ここで示されている「致命的な問題」とは、高浜虚子が考案した「熱帯季題」の構想を指している。「熱帯季題」についての考察は、その言説が出された昭和 11（1936）年以来、多くの俳人や研究者によって討論されてきた問題である。ただ、実際に当時において最も影響を受けた台湾俳人の視点から論じるものは意外と少ない。そして、本論の結論から述べれば、日本統治時代において、「歳時記」として刊行されたのは、小林李坪の『台湾歳時記』1 冊のみである。しかし、これは大正や昭和期において台湾俳壇が振るわなかったなどの理由によるものではなく、逆に、俳句研究を過分に重要視した当時の台湾俳壇の事情と深く関係しているのである。

大正期の台湾では、台北の「ミナミ吟社」が山本孕江（昇）を編集責任者にして、大正 10（1921）年 10 月に俳誌『ゆうかり』を刊行し、それを契機に結社も「ゆうかり社」と改名した。また、当初は、その方向性を特に定めていなかったが、後の同人の話し合いで、ホトトギス系の台湾俳誌という位置に意見がおおむね定まった。そして、昭和期に入るとゆうかり社は、多くの俳人の支持を得て、当時の台湾俳壇における最大の俳句結社として、第 2 次世界大戦の終結まで活動を続けた。なお、ゆうかり社が、台湾におけるホトトギスの地方結社と位置付けられている以上、必然的に、ホトトギスの高浜虚子を最高の指導者として仰いでいる。本稿は、まず、こうした高浜虚子と山本孕江の二人の関係や交流に注目し、この二人の関係が中央俳壇であるホトトギスと地方俳壇であるゆうかり社との関係性に読み換えられる可能性について提起する。次に、虚子によって考案された「熱帯季題」を巡る論点を考察し、特に、台湾俳人の「熱帯季題」「季」「歳時記」の考え方などを第一次資料によって検証する。そして最後に「台北俳句会」を例として、現在の台湾俳壇の状況と戦前の状況を対照しながら、「台湾季語」で日本語俳句を詠み続けるというスタンスを紹介し、本論の結論の一つとしたい。

第１節　山本孕江と高浜虚子の交友関係

山本孕江（昇）は、明治 26（1893）年 12 月に高知に生まれ、『台湾総督府職員録』によると、大正 4（1915）年に「打狗税関支署」（台南廳興隆内里硝船頭街）に「監吏」として勤務し、その月給は金 15 円であった（144 頁）。「打狗」とは現在の高雄のことだが、「打狗」という名前が卑俗であるということで、大正 9（1920）年に日本語の発音に近い「高雄」という地名に改称され、台南廳から高雄州となった。その関係で、孕江の勤務先も大正 9 年 12 月から「税関高雄支署」（高雄州高雄郡高雄街）に変わった（月給 52 円）。その後、大正 10（1921）年に台湾総督府農事試験場の庶務部に「書記」（月給 55 円）として赴任（196 頁）し、孕江は、この転勤により、6 年間生活していた高雄を離れ、台北に移り住むことになる。そして、この人事異動が、後の台湾俳壇の発展に大きな影響を及ぼすことになったのである[5]。

高雄時代の孕江は、大正 7（1918）年に創立した硝船頭吟社に参加していた。硝船頭吟社は、『石楠』同人の松田刻積が指導格であり、孕江の他に、土橋天羊、寺見帆風、牧野小竹らも同志であった。なお、孕江は同社の仲間と俳句の小冊子を出版しており、このころからかなりの編集力を既に身に付けていたことがうかがえる。そして、大正 10（1921）年 5 月に高雄より北上した孕江は、小竹の紹介でミナミ吟社に入り、当時、ミナミ吟社でも機関誌を出そうという話が現れ、その相談が大正 10（1921）年 9 月ごろにまとまり、こうした経緯から孕江は、同年 10 月に創刊した『ゆうかり』の編集を任された。その後、多くの台湾俳人を同志に迎えた『ゆうかり』は順調に発展するが、大正 14（1925）年 6 月に、経営者の大久保黙山が商売上の失敗から台湾を去ったため、孕江はその後、編集のみならず経営も担うことになった。こうして、経営と編集の両方を一身に引き受けた孕江は、以降、終戦の昭和 20（1945）年まで台湾俳壇を先導していったのである。また、孕江が率いたゆうかり社は、俳誌『ゆうかり』の他に、『台湾俳句集』『ゆうかり俳句集』など、台湾俳人の作品を集めた俳句集を世に送り出し、台湾俳壇の存在を大きくアピールしたのである[6]。

そして、山本孕江と高浜虚子との関係は、そのまま、『ゆうかり』と『ホトトギス』との関係に置き換えることができる。ゆうかりは、その成立当初、特に方向性を定めておらず、例えば西岡塘翠は、尾崎紅葉や巖谷小波が興した秋声派の紫吟社の傘下にいた俳人であり、『同人』派色彩の江上零々子や、『石楠』同人の松田刻積らも続々と参加していた。このように、ゆうかり社は、「来る者は拒まず」というスタンスでスタートを切ったのである。ただ、創刊 2 年目には、句会活動に熱心な浜中柑児や浜田坡牛らの指導の影響もあって、ホトトギス派の傾向をやや見せてはいた[7]。また、最初の雑詠選者となったのが、台湾新聞台北支局に勤めていた佐藤夜牛であり、虚子に師事していた彼は、虚子の台湾来訪にも一役を買っていた（本稿「第 2 節」参照）。そして、これら俳人の影響もあり、当初は特に方向性を定めていなかった『ゆうかり』は、大正 13（1924）年に同人諸氏の評定によって、ホトトギス派として旗印を鮮明にすることになったのである。

なお、ゆうかり社がホトトギス派の台湾支社のような存在であったことは、すなわち、ホトトギス派の俳人たちの支援を得られたことを意味している。ただ、同時に、ゆうかり社がホトトギ

ス派の、特に、虚子の季題に対する見解から自由になることが、いかに困難な立場にあったかも、容易に想像できよう。

こうして、大正 13（1924）年より、ホトトギス派系統を掲げることとなったゆうかり社の同人たちは、『ホトトギス』に頻繁に投句するようになる。また同年 12 月に、浜田坡牛が上京してホトトギス発行所を訪問[8]したのを契機に、両社の交流はますます親密になった。さらに虚子が題字した「ゆうかり」が、大正 14 年 4 月号から昭和 20（1945）年の停刊まで、ずっと『ゆうかり』の表紙で使われていたことからも、『ゆうかり』における虚子の重要性がうかがえよう。そして、昭和 2（1927）年 4 月には、高浜虚子の甥で、『ゆうかり』の題詠選者も務めていた池内たけしが台湾を訪れたが、台湾俳人はこれを大いに歓迎[9]するのみならず、『ホトトギス』『ゆうかり』両者の関係をより親密なものにした。そして、『ゆうかり』昭和 2 年 6 月号は「たけし先生歓迎号」として編集され、同年の『ホトトギス』8 月号も台湾特集として、たけしの台湾紀行や台湾俳人の文章などが掲載されている。

また、孕江は、昭和 15（1940）年 12 月にホトトギス同人に推挙される。そして、昭和 17（1942）年 11 月に個人の俳句集『山本孕江句集』を出版するが、その序文を虚子が執筆したのである[10]。虚子は、この序文の中で、台湾を訪問した際に、自動車の中で交わした熱帯季題の話題について、二人の間に意見の相違があったことに触れた他、台湾俳句に対する孕江の真摯な研究態度が非常に印象深かったことを以下のように記している。

> 〔孕江は〕其台湾の四季に安住して生活して居るのが吾等台湾の俳人である。吾等は別に台湾の歳時記を作つてそれに依つて台湾の俳句を確立しなければならぬ。と云ふやうな事を極めて熱心に、今自動車が何処を駆けつゝあるか、車内には何人が乗つて居るか、といふことも殆ど忘れ去つてしまつたかと思ふくらゐに熱心に其事を話すのであつた。（中略）孕江君の説には一理も二理も有るのである。其事は私もよく知つてをる。が私の説にも亦曲げ難いものがあつた。それは兎も角として私は此時の孕江君の熱心な態度を面白く思つた。同時に永く台湾に居て俳句を鼓吹して後進を誘導することに変らない努力をつゞけて居る其人の一面を理解することが出来たやうな心持がした[11]。

このように、考え方の相違はあるものの、個人句集の序文を依頼した孕江と、その依頼に応じた虚子の、二人の関係は良好であったと言えよう。

昭和期台湾俳壇の第一功労者である孕江は、その後、日本の敗戦により、30 年間住み慣れ、骨を埋めるはずだった第二の故郷である台湾を離れざるを得なくなり、一家ともども、生まれ故郷の高知に引き揚げた。そして、それ以降、俳壇における孕江の活動を見ることはできず、復刊した『ホトトギス』にも彼の投稿はなかった。ただ、昭和 22（1947）年 7 月号の『ホトトギス』に、虚子による孕江の「消息」が、以下のように伝えられている。

> 山本孕江君は台湾引揚後、高知市塩崎町の家に帰つてをりましたが、脳溢血にかゝり其後

書信も令息昶君より両三度ありし許かり、如何哉と憂慮してをりました処、四月二十四日遂に逝去の報知を受けました。多年台湾にあつて斯道に尽したるは周知のこと、私も一度台北に寄港した時分に其地で面会、茲に深追悼の意を表します。

台北は暑かりし其の人と為り（昭和二十二年五月二日）[12]

このように、虚子は、孕江が台湾を引き揚げ、故郷の高知に戻ったものの、間もなく、脳溢血で倒れ病床の人となり、もちろん、俳句活動も続けることができなくなったことや、子息の山本昶から最期の知らせを受けたことなどを、「消息」を通して報じたのである。そして、「多年台湾にあつて斯道に尽したるは周知のこと」という言葉にあるように、孕江は、台湾俳壇に生涯を捧げた俳人であり、その人柄は、「台北は暑かりし其の人と為り」との虚子の弔句の通りであったのであろう。

第 2 節　虚子の台湾来訪と「熱帯季題」

前に触れたように、虚子は昭和 11（1936）年に、フランス留学中の次男・池内友次郎を訪問する洋行の帰りに、一度だけ台湾を訪れたことがある。昭和 11 年 2 月 16 日に六女・章子を伴って南回りの箱根丸で日本をたった虚子は、3 月 28 日にパリに到着し、4 月 17 日まで滞在した後、帰途に着いたが、その途中に、台湾に立ち寄ったのである。そして、虚子のこの台湾行は、台湾俳人の懇願と努力によるもので、『ゆうかり』には、虚子の台湾誘致に関する同人たちの涙ぐましい交渉の過程が、以下のように記されている。

折角の願つてもない此の好機会を何とかして基隆からの御旅程を変更してせめて四五日間でも台湾の風土に接してもらひたい。殊に熱帯季題問題に大きな関心を持たれつゝある先生に此の亜熱帯地台湾を観察してもらふことは季の問題に悩む現在の台湾俳人にとつて又となき好機会であると断じてもよい。斯く感じたわれ／＼は全ての歓迎準備を整へ、箱根丸の新嘉坡出帆と同時に第一信無電を以て先生に懇願した……再度の懇願もした、亦古く先生に師事せられた佐藤夜牛[13]からも慫慂を重ねた。又香港気付を以て委細の様子と旅程試案をも示した。しかし、又の機会を約され、今回は遂にわれ／＼の希望実現に致らなかつた（下線は筆者による）[14]。

上掲引用の下線部分に着目すると、台湾俳人が虚子との対面を切実に望んでいた理由が分かる。つまり、4 月に虚子が新聞に投稿した「熱帯季題小論」に対する弁明の機会を得たいとの願いからである。この「熱帯季題小論」は、虚子が南洋・熱帯を通り過ぎた経験に基づいて考案し、パリ滞在中に 4 月 9 日の「大阪毎日新聞」と 4 月 14、15 日の「東京日日新聞」とに寄稿したものである。そして、この訪台の交渉は、虚子の『渡仏日記』にも記されており、関連する情報を抽出すると、以下のようなものである。

五月三十一日。（日曜）

尚今日、山本孕江君に、基隆に寄港はするが、時間は三四時間で何をするひまもない、唯寄港するといふことだけを申上げて置くといふ無電を打つて置いた。

六月一日。（月曜）

山本孕江君の返電が来て、台湾に二三日滞在して、それから別の船で帰れば、神戸で追付く事になるからさうして貰ひ度いと云つて来た。今回はさう云ふ訳に行かぬ事を返電した。（中略）

六月二日。（火曜）

絶えて久しき台湾新聞の佐藤夜牛君から電報で是非台湾に二三日滞在せぬかとの事。返電[15]。

『ゆうかり』と虚子の『渡仏日記』の両資料からうかがえるように、孕江をはじめとする台湾俳人は、数日だけでも台湾に留まって欲しい旨を虚子に懇願するものの、その願いは受け入れてもらえなかったのである。また、先に述べたように、虚子との懇談を切に望んだ最も大きな理由は「熱帯季題」によるものである。これは、季題においては、熱帯地でも適用できるものは内地の歳時記の季題に準拠すべきであるが、内地には無いもので、熱帯で新に季題として認めるべきものとして、例えば、熱帯の天文、地理、地名、動植物、著名な行事などは、そのまま熱帯部の項に入れて全て「夏」とすべきである、というもので、いわゆる「熱帯季題」論の発端である。そして、その最後には、「附けていふが、台湾、ハワイ、委任統治南洋諸島等も、大体これに準じてしかるべきであらうと思ふ。（大阪毎日 - 東京日日）」と、台湾も名指して、その範囲に入るべきだと虚子は述べている[16]。言い換えれば、台湾俳壇や台湾俳人に対して、季題の「使用基準」のようなものが示されることになったのである。

しかし、南洋やインドなどと同じ熱帯地域に属する台湾であるが、台湾俳人にとって、台湾は、それらと同一に扱われるべきではないという考えを持つ者がほとんどであった。さらに、台湾は、北部が亜熱帯、南部が熱帯であり、しかも山が高く冬に雪も降ったりすることのある気象環境であったり、旧暦の暦に基づいて多くの台湾伝統の慣習や宗教行事などが行われたりすることから、新季題となりうる台湾の動植物や人事を全て「夏」に帰属させるということに強い違和感を覚えたのである。そのため、台湾の俳人たちは、6月に帰国予定の虚子を待ち望み、熱帯季題について、十分に論議を交わす機会が得

図１　高浜虚子歓迎記念撮影（台湾神社境内）
虚子：前列左　　孕江：一列目右４
（出所）『ゆうかり』昭和 11 年 7 月号

られることや、台湾の「真実」を虚子自らの目で確かめてもらえることを強く期待していた。そして、待望の虚子を乗せた船が、ようやく、台湾北部の基隆港に寄港するのであるが、虚子本人は、その日の体験を次のように記している。

> 六月六日。（土曜）
> 俄に涼しくなつた。
> 朝飯後甲板に出て見ると右舷に山が見えてゐた。船は台湾に沿うて北に航して居るのであつた。
> 雨が降つて来た。
> 二時半基隆に着いた。船より見たとき、家が低くて貧弱な感じがするのは止むを得ない。
> 佐藤夜牛、山本孕江、高須賀南北、門川義雄、樋口玉蹊子、藤田芳仲、大毎基隆通信部土居鶴雄、近海郵船支店長松本晄吉の諸君が船まで来た。間もなく上陸。
> 基隆市尹桑原政夫、大毎台北支局長喜多収一郎の諸君に、前記の諸君が加はつて台北まで自動車を駆つた。先づ台湾神社に参詣、台湾総督府中央研究所技師中澤博士、同服部衣山、防本〔ママ、坂本が正しい〕原人、江原敦朗、其他台湾俳人諸君の集団に挨拶し、広前で記念撮影、それから台北市中の主な町を一巡し、台湾新聞支局と大毎支局に車を止め、直ぐ帰路に就いた[17]。

つまり、虚子の台北滞在は極めて短時間で、台湾神社を参拝し、車で台北市内をわずかに回った後、すぐ基隆に踵を返し、友人らと歓談した後に客船へ戻ったのである。そして、句会を開くこともなく、交流らしきイベントと言えば、台湾の俳人たちと台湾神社の境内で記念写真を撮ったぐらいで、台湾俳人らがあれほど待ち望んだ虚子との対面は、呆気なく終わったのである。これに対して、当日の状況を記した孕江の次の一文からは、虚子とは違う視点の、いわば接待側の台湾俳人の心情をうかがうことができる。なお、この一文は、ゆうかり社の代表である孕江の、当日の努力を知る上で重要な資料であることから、その一部の概要を掲出する[18]。

> 虚子先生と同車にて台北から再び基隆へ向ふ途中、台湾の季の問題に就いていろ／＼先生に質問した。傍らの楠窓氏[19]、夜牛氏もいろ／＼意見を吐かれた。（中略）私はこの論に対しては、台湾といふ亜熱帯地に於て鵜呑みには承服され難いことを述べた。かうした話題に熱中してゐるとき、突如自動車事故が突発したので、先生一行と暫く別れるの余儀なきに到り、話はそこで中絶して終つた。先生の御説の真意を充分納得するまでに到らず、又台湾の季の問題に就いて了解を願ふ程度の説明さへも出来ず、お別れして終つたことは返へす／＼も残念の至りであつた[20]。

台湾俳人が切望した虚子の訪台であったが、結果として、虚子は、わずかな時間しか台湾の地を踏まなかった。しかし、以上の引用から分かるように、わずかな時間であったが、孕江たちは、

俳句の師と仰いでいる『ホトトギス』の主宰・虚子に、熱帯季題が台湾には適用できないと熱弁をふるった。だが、残念なことに、虚子がこの洋行の途中に発表した熱帯季題の構想について、台湾俳人が虚子と議論する時間は、ほとんど得られなかったのである。言い換えれば、虚子の訪台に対する台湾俳人の失望の大きさの原因は、単に、その滞在時間の短さだけではなく、交流や議論といった内容の薄さに起因しているのであろう。ただ、見逃してはならない重要な点として、熱帯を通過した体験に基づいた熱帯季題の提案は、日本と季節感の一致しない熱帯地に対し、虚子なりに考え出した解決法であったのであろうということが挙げられる。例えば、『渡仏日記』5月30日付けの記事には、シンガポールでの日本人句会で、虚子の代わりに挨拶の講演をすることになった上ノ畑楠窓が、次のように話したのが記されている。

> 〔海外邦人〕その皆さんの中から、親しく先生の御来遊を乞ひ、熱帯地風物を御覧願うと共に、その作句上の特殊性について先生の御示教に預る事を得ば、如何に幸福であらうかと云ふ熱心な御希望を漏らさるるのを縷〻耳に致し、私もまた全然御同感で、先生にも折々其事を御願して来たのであります。今回先生が御来遊を決行なさつた諸動機の中に、皆さんの熱心なる御勧誘が一つの誘因を為して居る事を知つて居る私は、皆さんと共に衷心本懐に思ふ次第であります。其結果と致しまして、御承知の如く歳時記の夏の部の中に「熱帯季題」なる一項目が挿入せらるゝ事に先生の御腹案が決定して居るやうに承つて居る事は、是は一に皆さんの俳句道御精進さから来たものであるとして、大に喜ばしく存ぜらるゝ次第であります[21]。

虚子が、楠窓の談話を『渡仏日記』に詳しく記したのは、彼が虚子の気持ちを代弁しているからであろう。客船の機関長を務める楠窓は、南洋の俳人と接触する機会を多く持ち、日本と気候習慣を異にする当地の風土を、邦人がうまく処理できなかったことも熟知していたのであろう。これは、虚子がそれに対処すべく考案した熱帯季題を、楠窓は擁護するスタンスであった。ただ、熱帯季題は、内地の季節感を不動なものとするために、南洋・熱帯地域の自然・人事などを全て一括して熱帯季題として「夏」に分類したことが、最も大きな問題として存在した。そのため、台湾俳人らは、虚子の台湾来訪の機会を切に望んでいたわけである。しかし、熱望した虚子の台湾訪問はわずか数時間で終わり、さしたる結果を得ることはなかった。それどころか、孕江ら台湾俳人のこうした思いや力説の努力のかいもなく、虚子は、熱帯季題の構想を取り消すどころか、さらに、『ホトトギス』昭和11年9月号に「熱帯季題小論補遺」を発表し、「地方々々で歳時記が出来たら俳句の統一がむづかしくなる」として、「又台湾の歳時記、北海道の歳時記を作つてもいゝが、内地の歳時記を宗としなければならぬ。日本の四季に重きを置けばこそ熱帯を常夏の国と見る」（下線は筆者による）という見解を示し[22]、昭和15（1940）年の『新歳時記』改訂版に35の熱帯季題を7月季題の次に入れたのである[23]。

さらに虚子は、『ホトトギス』昭和18年4月号に「熱帯季題について」の一文を掲載したが、これは、『ゆうかり』主宰の山本孕江の個人句集『山本孕江句集』の序文より抜粋したものである。

虚子は、この序において、昭和 11（1936）年以来唱え続けてきた熱帯季題についての考えを改めて表明し、内地（中央）の季題と歳時記を絶対の基準とする姿勢を示したものとなる[24]。そして、日本による台湾統治が終結するまで、虚子はついに、熱帯季題を見直すことはなかった。

第 3 節　台湾における季の問題――「熱帯季題」構想前の台湾季題についての言及

温帯の日本とは異なる台湾の自然や風土を、俳句をもってどのように表現するかといったその苦悩と努力は、日本の俳人たちが台湾に移住した時、もしくは、俳句が台湾に伝わった時から、既に始まっていたと言ってよかろう。そして、台湾独自の歳時記を制作する必要があると強く感じたのは、河東碧梧桐から感銘を受けた、俳人・小林李坪であった。また、最初の海外俳句歳時記である『台湾歳時記』（明治 43 年）をはじめ、明治期台湾俳人の句を網羅した俳句集『虎尾蘭』（諏訪素濤編、大正元年）、俳誌『相思樹』（明治 37 年創刊、竹風吟社）、『緑珊瑚』（明治 41 年創刊、緑珊瑚会）などの刊行は、明治期の台湾俳壇の大いなる成果として挙げられよう。つまり、異なる季節や風土を、いかに俳句を介して描き上げるべきかといった問題点は、昭和期の「熱帯季題」論の炎上を待つまでもなく、既に、明治期においてさまざまな反省と努力がなされていたのである。なお、明治期の台湾俳壇事情については沈美雪『明治期台湾俳句界の始原的実像――近代俳句の台湾表象』[25] に詳しいので、それを参照いただきたく、ここでは、熱帯季題構想が発表される前、つまり、昭和 11（1936）年までの、大正、昭和期のゆうかり社同人の「台湾季題」「歳時記」に対する見解を、概略的に見ていこうと思う。

大正期において、虚子の外地俳句に対する考えにいち早く反応したのが、山本孕江である。虚子は、満鮮旅行[26] の際に参加した当地の俳句会の体験から、満蒙の風物は「俳句の世界には不向」きで、「満蒙へ行つて、始めて俳句は日本なればこそ生れた特有の文芸であるとの感を殊に深うした」と述べている。孕江は、この虚子の発言に対し、満州のことはいざ知らず、「日本本土を離れての台湾に於て数年を過し、落ついた心持で一木一草を見たとき、かなりそこに詩味を感じ得る。台湾は確かに俳句の世界に生き得べき所であらう」と、台湾俳人としての所見を述べた[27]。ただ、孕江のこうした所見は、「満蒙の風物」に対する虚子のコメントを否定するものではなく、ただ、「俳句は日本特有の文芸」云々の文言に敏感に何かを察知した孕江が、「外地」「台湾」の住民として、台湾は俳句が育ちうる土地であるということを台湾俳人の立場から明言したもので、さらに、「我々が現に生活しつゝある雰囲気を俳化」する表現の問題に対する動きとして、「台湾の季感に適応すべき或る約束のもとに新に台湾歳時記を作成して作句にかゝらなくてはならない」（下線は原文傍点）といった心構えが台湾俳人に必要であるとしているものである[28]。この一文には、孕江の台湾俳句に対する重要な見解が込められている。先に言及したように、俳句は日本でこそ生まれる文芸という虚子の言葉に対し、孕江は台湾に秘められている俳句の可能性を主張し、その実践として、新しい「台湾歳時記」の制作が急務であり、そうすることで「地方的色彩」が濃厚な句、つまり「真の台湾俳句」を生み出すことが可能となる、と説いたのである。だが、この時点において、外地としての台湾の風物を、俳句に詠む際に直面しうる季の問題の解

決策として、「台湾歳時記」の制作を提案した孕江であるが、後の台湾俳壇の発展状況や、昭和11（1936）年の「熱帯季題」論以降、この考えに少しずつ変化が生じたのである。

これに続いて同じ外地としての台湾について考えたのが、孕江の弟である山本みさくである。山本みさく（1926）は、樺太と朝鮮の俳句を取り上げ、樺太に比べ、朝鮮俳人の置かれている境涯は、台湾俳人のそれと共通する点が少くないとした上で、「内地人と異なつた風俗、習慣を持つ朝鮮人を眺める眼は即ち我々が本島土人に対するの情と似通つたものであるのにちがひない」と、「外地」で生活する「内地移住者」の眼差しを指摘している[29]。そして、「自分達の朝鮮」について、存分で、かつ、大胆な発表をためらわないほどの自信をもっている朝鮮俳人を鑑として、台湾俳人も「台湾をよく理解し、その境涯からにじみ出たやうな句」を作ることを目標とすべきであると説く。さらに、「我々の先輩の現在までの足跡は台湾にも俳句が出来ることを明にしたに過ぎない。更に進んで天下に通用する台湾俳句を創造することに我々は努力せねばならない」とし、先人の礎の上に立って「天下に通用する俳句」を目指すことが台湾俳人の責務であると述べたのである。

ところで、『ゆうかり』大正15年8月号には、台湾俳句の在り方や作品に対する内省、そして、台湾俳句の進むべき方向性についての、本格的で研究的な視野を取り入れた「台湾俳句の研究」の第1回が掲載されている。そして、その第2回の記事において、浜田坡牛は、台湾俳人の中には、いまだ、台湾季題をどう扱えばいいかよく分からぬ者がいるといった現状を指摘し、こうした「季感の矛盾」は「季題の混乱から来る矛盾感」であるとした上で、「台湾季題」の原則として、「人事の如く暦によつて容易に解決し得るものは大体暦によつて決定し、其他は全然、暦と切り離して季題の本質たる季感によつて決定すべし」（下線は筆者による）と提案した[30]。坡牛のこうした解決策は、すなわち、従来の季題観念に囚われることなく、当地の「季感」に従って作句するということであり、後の台湾俳人もおおむね、このようなスタンスを取ることを、ここで指摘しておきたい。加えて坡牛は「台湾俳材の研究」が相当に進んでいる現状に触れ、ゆうかり社は率先して「台湾季題の確立」という目標に向かって邁進しなければならない、とも呼び掛けており、坡牛のこうした一文は、台湾俳人の問題を指摘した上で、その解決法として台湾季題の確立の重要性を訴えているのである。

さらに、『ゆうかり』元老役の服部海雪は、『ゆうかり』大正15年10月号において、ゆうかり成立5周年に際して台湾俳壇を回顧し、台湾俳句勃興の機運を促進した明治43（1910）年の小林李坪による『台湾歳時記』の公刊は、台湾俳壇史における大いなる功績であると称えた上で、先人が築き上げた礎の下で、台湾俳人に対する期待として、以下の3点を示した[31]。

(1) 地方的俳句として台湾俳句が広く認められるように努力すること

(2) 表面的広さの開拓に止まらず、内面的深さの開拓に向かって猛進すること

(3) 台湾俳句を中央俳壇へ紹介すること

そして、(3) の台湾俳句を中央俳壇に紹介する具体的な方法として、①完全なる台湾歳時記の公刊、②ゆうかり社の毎月の募集句に台湾季題を加えて、時折、句集として発行、③内地の大家に台湾の事情を理解してもらう方法を講ずる、④互いに大いに台湾俳句を宣伝する――の4点を

挙げた。また、ここで留意せねばならないのは、中央俳壇へのアピールとして、何よりもまず重要なのが「完全なる台湾歳時記の公刊」であると、海雪が考えていることである。つまり、既に絶版となった李坪の『台湾歳時記』の代わりとなる新しい地方歳時記が必要であり、こうした歳時記の公刊は台湾季題の確立を意味し、上掲の②③④の要点とも、直接に関連するものと言えるのである。

次に、どうしても言及せねばならない重要人物として、大正 11（1922）年 7 月より長い間にわたって『ゆうかり』誌に「台湾俳材解説」の連載を続けた、西岡塘翠を取り上げたい。西岡塘翠は、小林李坪の『台湾歳時記』に感銘を受け、かつ同人からの要請もあり、『ゆうかり』に台湾の風物を解説する「台湾俳材解説」のコーナーを始めた。なお、上述の坡牛が言及した「台湾俳材の研究」とは、塘翠のこの連載を指している。そして彼は、自らの執筆経験から、台湾のような海外で俳句を詠む場合は、季題に拘泥する必要はなく、「季題から超越」しても差し支えないとした上で、台湾の実情を反映するような「異彩を放つ地方色」のある歳時記を作るべきだと説いた[32]。また、ゆうかり同人も、塘翠の「台湾俳材解説」が、台湾を代表する 2 冊目の「台湾の歳時記」として出版されることを望んでいた。だが、結果として、それは実現されることはなく、それには、虚子の熱帯季題論が台湾俳壇に投げ掛けた暗示と無関係ではない。塘翠の「台湾俳材解説」とその季題観の分析は、内容が膨大になることから、改めて別稿にて論じることにし、ここでは簡単に触れることに留まりたい。

そして、季題の問題を論じるものに、昭和 6（1931）年に発表された山本孕江・藤田秀水の「季重なり問答」の対談が挙げられる。この対談では、台湾には日本から見れば違う季節の景物が同時に存在することがよくあるため、日本の「季」に囚われるよりも、実際に感じ取った真実を詠むべきであり、合わせて、台湾俳句の問題は「台湾季題の確立」に帰結するとしている[33]。また、次号に掲載されている「歳時記と台湾」一文において、「真の地方色を発揮する為には地方的季題に立脚して而して句の上に新生面を開拓することが急務である。之が為には中央俳壇に一日も早く台湾歳時記を送り出すことを痛感する」という秀水の発言に対して、孕江は台湾の歳時記の制作に肯定的である一方で、その難題の一つとして「天下に発表して恥かしからぬ代表句を得ること」を挙げ、そのためには、台湾の作家に「常に研究的態度を持つ」ことを期待するなど、『ゆうかり』主宰としての見解が述べられた[34]。

以上の論が示したように、緯度の差異などから、日本と台湾との間に季節の差異が生じるのは当然なことで、句を詠むにおいても、日本の季題観念に固執せず、台湾の「季感」によるべきであると主張する声が多かったことが分かる。そして、その方針や実際の対策として、台湾の歳時記を製作すべきだという意見も、当然のように見られたのである。

第 4 節　昭和期の台湾俳人は「熱帯季題」をどう見ていたか

虚子の熱帯季題論に対し、もし季節の変化がなく一年中「夏」であるとすれば、むしろ「季」は存在しないのに等しいという批判は、荻原井泉水によって早くも示された[35]。そして、『ゆう

かり』の課題選者として、かねてより台湾俳壇との関わりを持つ吉岡禪寺洞も、虚子の熱帯季題構想を「遮二無二杓子定規をあてよう」なものであるとし、それによって悩まされている台湾俳壇は「無季俳句」の可能性を考慮すべきだ、と提言した。特に、「無季俳句」を提唱する禪寺洞としては、必ずしも、俳句に一つの季語を墨守する必要はなく、「季題を解放」し、「制約的な季観念から、純粋な自然への参入」こそが、日本本土と非常に隔たりのある地方俳壇としての「台湾」が進むべき方向性であるとした[36]。

なお、当時の内地（日本）俳人の熱帯季題に対する、禪寺洞以外のさまざまな見解については、筆者の旧稿[37]で紹介したことがあるため、本論文では主に、台湾俳人の視点に立って、熱帯季題の論点の渦の中に置かれている台湾という「地方」といった、いわば「内なる視点」で熱帯季題の諸問題を考察することにしたい。まず、当時の台湾俳壇の代表格である孕江から見ていこう。

『ゆうかり』主宰の孕江は、どちらかと言うと、熱帯季題論が虚子によって出されるまでは、台湾俳壇の重鎮として、台湾独自の歳時記を編むことに意欲的であった。そして、前に言及した西岡塘翠の「台湾俳材解説」が長く連載を続けており、いずれは、台湾俳人の句を配して、小林李坪の『台湾歳時記』に次ぐ、2 冊目の台湾の歳時記が世に誕生することを彼は期待していた[38]。しかし、昭和 11（1936）年に「熱帯季題」論が発表されて、台湾のみならず、日本内地の俳壇からもさまざまな批判的意見が出されたにもかかわらず、虚子は熱帯季題に固執し、以降、さらに持論を展開したのである。

孕江は、先に記したように、虚子の台湾来訪の際に案内役として付き添い、その車内で、台湾風土の独自性を、再三、虚子に訴えたが、その効果はあまりなかった。ただ、台湾の俳人として熱帯季題の構想を受け入れることはできない一方で、立場上、『ホトトギス』の虚子を強く批判することもできなかった。そうした彼が始めたのが、「熱帯圏」という連載の執筆であった。「熱帯圏」は昭和 12（1937）年に第 1 回が『ゆうかり』8 月号に掲載され、昭和 16 年 2 月号まで、計 33 回連載された。そして、「熱帯圏」の執筆時期やその内容から、虚子の熱帯季題論に対する、台湾俳人としての反論が込められている部分があると思われる。その中でも、昭和 13 年 5 月号の内容は、熱帯季題について明確に言及した箇所がある[39]。それは主に、「台湾俳句は季題よりも「季感」に依拠」すべきで、「内地の歳時記をそのまま使用するのは危険」であり、「熱帯季題の範疇から台湾は除外されるべし」といった内容に要約できる。そして、『ゆうかり』昭和 15 年 7 月号の「熱帯圏（二十八）」では、さらに、「結局台湾に於ては季感に即して自由に詠ふのが自然であつて、季題よりも俳材研究に重きを置くべきである」と述べ、四季の風物に対してその「季」を規定するような「歳時記」の形ではなく、「季感」に基づいた台湾の季物解説といった性質の著作こそ台湾俳壇に必要である、と主張している[40]。そして、こうした考えは、昭和 13（1938）年ころには既に固まったと考えられ、例えば、『ゆうかり』創刊 200 号を記念する句会「ゆうかり二百号記念座談会」において、話題が長期に連載している塘翠の「台湾俳材解説」の出版に及んだ際、孕江は次のように語っている。

私は台湾歳時記を作るといふことは問題だと思ひます。それは台湾の季感の実情に即した

歳時記たらしめることはなか／＼困難なことで、若し無理をしてまで拵へると結局自縄自縛に陥らぬとも限らぬからです。しかし台湾俳材の解説として出版することは至極結構なことであり、又極めて必要なこと丶思ふのです[41]。（下線は原文傍点）

上掲の語りから見れば、台湾の歳時記の制作に対する孕江の意欲は、明らかに以前のそれとは異なっている。彼自身の説明によれば、この意識の変化は、表向きには台湾の気候の複雑さに起因する[42]が、その背後には、熱帯季題や地方歳時記などに対する虚子の一連の発言による影響も相応にあったと思われよう。

では、ゆうかりの他の同人は、虚子の台湾来訪の成果を、どう評していたのだろう。編集部同人の烏秋生（江原敦朗）は、『ホトトギス』昭和 12 年 1 月号に掲載されているホトトギスの座談会記事において、席中で話題となった熱帯季題に触れ、熱帯季題に賛同する俳人・みづほ（中田瑞穂）の「日本のやうな気候の変化のない熱帯の人々には、いつまでも句の上達が望めない」との発言に対し、次のように反論を挙げたのである。

従来でも、われ／＼が内地にない季題でも台湾特有なもので季感を覚えるものは、季題としてどし／〃＼使つてゐるので、今更熱帯季題制定でもあるまいと思ふ。要するに其の季題そのものに季感ありや否やで決定される問題である。いくら熱帯特有なものでも季感を覚えないものは句として感激がない、それは、無季俳句と何等選ぶところがない、とかう考へる。中央で季題として認めないから、といつてそれを句として発表出来得ないものではないと思ふのである[43]。

さらに烏秋生は、『ゆうかり』昭和 12 年 6 月号にて、同年 5 月号の『俳句研究』に掲載されている「再び無季俳句に関して」と題する吉岡禪寺洞の一文における、「季題を開放すべし」とした台湾俳人への呼び掛けに対して、台湾には台湾の季感があり、台湾俳壇は既に「台湾の季感による俳句によつて立派に救はれる」と、熱帯季題にも無季俳句にも否定的な立場を示している[44]。また、烏秋生は『ゆうかり』昭和 12 年 8 月号で、「台湾作家の参考の資」として、『俳句研究』に掲載された池田重二「ブラジルの俳況」[45]の一文を引用し、同じく海外の俳壇としてのブラジルの俳句事情を伝えた[46]。そして、烏秋生は、この抜粋引用の中で、日本と気候習慣を異にするブラジルでは「日本の歳時記では用を達し得なくなつた」（下線は原文傍点）という認識に基づく、池田重二の「各国邦人殖民地に依る季題の確立と共に殖民俳句の独立性を叫ぶ」（同）という呼び掛けに賛同の念を表した上で、実感の薄い内地回想句は、なるほど内地の選者に受けはいいかもしれないが、池田重二が指摘したように、「現実的境地を体験し得ない」句は「植民俳句としては現実性を失してゐる」（同）と言わざるを得ないと述べた。さらに、烏秋生は「望むらくは内地俳壇先輩諸氏の来遊により実地環境に立つ台湾俳句を観賞してもらひたいことである」と結論し、相互理解の重要性を訴えているのである。

また、台中で俳誌『竹雞』を主宰する阿川燕城（1942）は、『俳句研究』昭和 17 年 11 月号に「台

湾に於ける季題のありかた」を発表し、「我々は微弱ながらも台湾に於ての四季のうつりを感得し、涸渇し勝ちな情操にうるほひあらしめて行かねばならない」と、台湾にも季節の変化があると説き、「季感」を主体とする俳句は台湾に必要な文芸であると述べている[47]。さらに、上述の台湾俳人に続き、『ゆうかり』最初の本島出身同人である王碧蕉[48]は、「俳句の大東亜性」と題する論文を、『俳句研究』昭和18年4月号に投稿した。王碧蕉はまず、俳句における季の「地方性」について語ったのは、現今の日本俳壇ではごく一部の人のみであり、まだ十分に研究されていないものであると指摘した上で、「中央の人は中央の「季」に、台湾の人は台湾の「季」に、南洋の人は南洋の「季」に、更、満州、中華、アリユーシャン列島等の住民は各自の地方の「季」に帰依して俳句する安住性を見出す」と述べ、俳句の地方性や特殊性こそが俳句の特徴であるとするこうした主張は、現地に生まれ育った俳人ならではの見解と言える[49]。

以上に見てきたように、虚子の熱帯季題論は、日本の植民地の拡大に伴って、熱帯や南洋などの「外地」に移住した人々の生活の実感を無視し、あくまで「内地」（日本）の季節を不動のものとするといった考え方である。だが、明治期から既に結社が活動し、いくつもの俳誌が刊行されるなど、地方俳壇の長い歴史を有する台湾俳人にとって、こうした熱帯季題は、到底、受け入れ難い考えであった。そして、ホトトギス派系統の『ゆうかり』同人と言えども、新しい季題になり得る台湾の風物を、虚子のいう「熱帯季題」所属地に台湾が含まれているが故に、全て「熱帯季題」として「夏」に配置されるというのは、台湾には「夏」以外に季節がないと宣告されるに等しいと、多くが考えた。そのため、台湾俳人はこの問題に対して、「熱帯季題」や「無季俳句」などといった議論ではなく、台湾には台湾の「季」があり、台湾の季感に基づく作句の姿勢があるということを、自らの方向性としたのである。

第5節　削除された「熱帯季題」、そして台湾の俳句歳時記

熱帯季題に関する論争が収束見えない中、第二次世界大戦が終焉を迎えた。そして、昭和26（1951）年に刊行された虚子の『新歳時記』増訂版（第3版に該当）では、熱帯季題が削除されている[50]。虚子は、その削除の理由について何も語らなかったが、筑紫磐井は、熱帯季題の削除について、以下のように述べている。

> 熱帯季題の消長はこれらの虚子の季題論の運命と共に考えるべきである。文学的実作向け歳時記は極めて現実的な日本国家のあり方と関わってくる。日本の領土の伸展に従って季題は拡張する一方、予想もしていなかった敗戦により領土が縮小すれば削除すべきは当然でもあった。新季題とは、極めて政治的、経営的配慮により体系的に増えかつ減るものなのであった。「俳句は季題諷詠の文学である」とは戦前にあっては「（日本帝国の）季題を諷詠する文学で」であり、戦後にあっては、「（民主国家日本の）季題を諷詠する文学」となった。虚子はいつも時代と共にあったのである[51]。

戦前において、あれほどの争点を引き起こした熱帯季題を、一言もなく削除した虚子にとって、熱帯季題とは、海外季題の可能性を探究するためのものというよりは、拡大していった日本領土で直面した季の問題に対する解決策として考案したものであったのであろう。ただ、虚子自身の基準から見れば、熱帯季題が削除された時点で、虚子が作った熱帯季題関係の句は、全て無季の句になってしまったのである。そして、「客観写生」を唱えつつ、日本の歳時記を絶対基準とする虚子によって考案された熱帯季題には、熱帯や南洋で実際に生活している人たちの考えや主張は反映されていなかったと言わざる得ないのであろう。中島斌雄（1968）は「三代俳句受難史」一文において、虚子と碧梧桐について次のように述べている。

> 子規没後、門下の双輪は、二つに分かれ去つた。高濱虚子による保守伝統派、河東碧梧桐のひきいる新傾向派、両者はそれぞれ子規の遺産、雑誌「ホトトギス」、新聞「日本」に拠つた。守旧派はしばらく措く。進歩派、俳壇に新しい傾向を巻きおこすことを期した。明治の終わりから、大正の初頭にかけて、それは燎原の火のように全国を席捲した[52]。

そして、台湾俳句界も、上掲のような中央俳壇の動きに敏感に反応し、明治末期には、ホトトギス派の「竹風吟壇」（俳誌『相思樹』を刊行）に取って代わるように、碧梧桐の台湾来訪を契機に「緑珊瑚会」が新傾向派に転向し、俳壇を掌握するようになった。また、この時期における最大の成果として、小林李坪の『台湾歳時記』があり、明治期台湾俳句の総集編とも言える諏訪素濤『虎尾蘭』も編まれた。そして、これらの書物の出版には、碧梧桐の台湾来訪や彼の新傾向主張の一つである「地方的特習」も無関係ではなく、むしろ、その背景には、両者の深い結び付きがうかがえよう。さらに、『緑珊瑚』から大正 10（1921）年の『ゆうかり』創刊までの台湾俳壇史を紡いだ俳誌『熱』の編集者が諏訪素濤であり、彼が碧梧桐に私淑していたことからも、明治末期から大正初期にかけての、台湾俳壇における碧梧桐の影響力は看過できない事実であろう[53]。そして、『ゆうかり』が、その創刊から停刊までの二十余年の間に、台湾俳壇における最も力のある俳誌となった背景に、『ホトトギス』を代表とする中央俳壇との関係性が、重要な鍵として存在することは、もはや、再言を要しないだろう。

以上に述べてきたように、ホトトギス派の俳人の支援を受けた、ホトトギス系統の台湾支社としてのゆうかり社は、いろんな意味で、虚子の意思から完全に自由になることはできなかったのかもしれない。また、孕江個人の句集『山本孕江句集』の序文を執筆した虚子であるが、昭和 11（1936）年 6 月 6 日に台湾を訪れたものの、その地には数時間しか滞在せず、また、熱帯季題では律しえない台湾の気候風土について、車中の短い時間を利用して熱く語った孕江の様子に深い印象を受けたものの、その懸命の語りに心を動かされることもなかったのである。こうした虚子の姿勢は、明治 43（1910）年の小林李坪『台湾歳時記』の序文を執筆した碧梧桐の、海外の季題に対する態度とは対照的であると言える。そして、その結果として、『台湾歳時記』に対して最大の賛辞を送った碧梧桐に対し、虚子の熱帯季題に関する一連の発言は、昭和期の台湾歳時記の制作を台湾俳人に躊躇させた。また、考えてみれば、碧梧桐と虚子の因縁が、日本統治時代

の台湾俳壇に大きな影響を残したことは、不思議な感がしなくもない。

このように昭和期において未曾有の隆盛を迎えた台湾俳壇ではあるが、結果、台湾の歳時記は制作されなかった。そして、台湾における2冊目の俳句の歳時記は、台北俳句会の創設者である黄霊芝会長（1928～2016）[54]の『台湾俳句歳時記』（言叢社、2003）を待つこととなり、明治43（1910）年刊の小林李坪の『台湾歳時記』から、97年後のことである。1970年に結成された「台北俳句会」は、創設40年余りの年月を数えるもので、代表者の黄霊芝は、『台湾俳句歳時記』一書をもって、2004年に第3回「正岡子規国際俳句賞」を受賞するなどの実績を誇る。そして、この受賞をきっかけに、俳人・金子兜太が台湾を訪れ、台北俳句会の一同と歓談するなどもした。当時、兜太85歳、黄霊芝76歳のことである。そして金子兜太は、『台湾俳句歳時記』について、以下のように「非常にユニーク」と評している。

> 『現代俳句歳時記』をつくった後で反省したのは、台湾を代表する黄霊芝という詩人が出した『台湾俳句歳時記』、あの季節別分類というのがおもしろかったんだ。暖かいころ、暑いころ、涼しいころ、寒いころの四分類なんですね。春夏秋冬じゃないんだ。これも非常にユニークでしょう。暮らしに即して春夏秋冬にこだわらない。やっぱりそこまで割り切っていかにゃいかんと思いましたね[55]。

黄霊芝会長が亡くなってからの最近の数年は、毎月の句会に出される二つのお題のうちの一つは、『現代俳句歳時記』より選ぶ傾向にある。いわゆる「台湾季語」である。また、幹事の一人である三宅節子は、「台湾で生活している我々が、台湾の独自の季語を使って俳句を詠まなくちゃ誰が詠むの？」と発言している。つまり、台北俳句会員と自称している以上、台湾の風景を詠むのは当然のことだ、という感覚である。そして現に、『台湾俳句歳時記』という台湾俳壇の宝があり、それを使うことが自然であり、それを使わないのはもったいない、という考えでもある。そして、俳人・王碧蕉が78年も前に言ったように、「台湾の人は台湾の「季」に」「各自の地方の「季」に帰依して俳句する安住性を見出す」ということなのである。

1930～40年代においては、日本内地で「郷土」「地方」に対する関心が高まりつつあり、また、島田謹二によって提起された「外地文学」という枠組みもあった。ただ、現在の台湾研究において、島田謹二の『美麗島文学志―日本詩人の台湾体験―』（明治書院、1995）は広く知られているが、島田よりも早く明治期において既に、台湾の風土に立脚した郷土文学の発揚を目標として掲げた文芸総合誌『台湾文芸』が明治35（1902）年に創刊されたことを知る人は少ないかもしれない。『台湾文芸』の編集者は、村上玉吉（俳号・神洲）という文化人であり、彼は母国（日本）の美に対して、「台湾の美はまた一種特別の趣ある」と、独自性のある台湾文学を志向することを『台湾文芸』の目標と定めている[56]。その3年後の同38（1905）年に、小松吉久が「植民地文学《台湾趣味》の発揮」を発表[57]する。そして、同論における「台湾趣味」は「あらゆる分野の文学において目指すべき趣向として提起されたものであるが、後に、俳句の分野において、台湾に在住する俳人らの一指針になるまでに展開した」のである[58]。このように、台湾の外地文学論

の系譜から考えれば、外地文学の持つ郷土性、特殊性、地域性などは、常に俳句の創造や研究と共に、時代の人々によって思考され、培われてきたとも言えよう。

おわりに

本論は、虚子の熱帯季題論と孕江の台湾の季題観との関係を、日本帝国が広げた領土の中心対周縁の図式をもって解釈を試みたものである。日本の勢力拡大に伴う俳句の海外輸出により、世界各地で俳句が作られるようになってから、季語の使用が一つの問題として浮かび上がった。つまり、これら海外の地において、従来の日本歳時記や季題趣味を、そのまま踏襲することに限界があったのであろう。そして、こうした中で示された熱帯季題の構想は、台湾の俳人たちにとって、自分たちがその実生活に基づいて詠んだ句の多くが、熱帯句として「夏」の季と決め付けられるようなもので、彼らがようやく手に入れた外地俳句の可能性を否定する言説に他ならなかったのである。

染川清美（2014）は、台湾季語に対する山本孕江の心情と、高浜虚子の台湾訪問について、「「内地」の季語と台湾季語との齟齬を意識しつつ作句する苦労は常に付き纏い、昭和 11（1936）年、虚子が欧州旅行からの帰国の途、3・4 時間、基隆港に立ち寄って山本孕江と会った際も、話題は台湾俳句をすべて「内地」の夏の季語にくくるのでなく、台湾独自の歳時記の確立が早急の課題であるとして、孕江が熱心に虚子に訴えた」としている[59]。つまり、筆者が検討を重ねてきたように、「内地の日本」と「外地の台湾」の間にある季題の問題に対する一つの解決策として、孕江ら台湾俳人は、独自の「歳時記」の作成を考えていたのであるが、この海外歳時記の構想やその有効性は、虚子の熱帯季題論によって否定されたのである。なお、今井祥子（2005）は、「熱帯の風物すべて一括して「夏の部」に属させるというのは、ありのままにではなく、そこに「日本」の枠組みをかぶせ、その限りにおいて対象を捉えるに等しい。孕江らには「台湾俳句」の確立を阻ものとすら映ったのではないだろうか」と、孕江ら台湾俳人の悩みを伝えている[60]。虚子来台時の孕江の苦悩は、「内地季語と台湾季語との齟齬」といった問題のみならず、「地方歳時記」に対する、指導者である虚子とゆうかり同人との意見相違を根底とした苦悩でもあった。しかしながら、『ゆうかり』が、ホトトギス派の地方俳誌であると同時に、外地台湾を代表する俳誌でもあり、こうした二つの立場の間で揺れ動いたゆうかり社の同人は、中央俳壇の援助を受けている立場であるが故に、独自の歩みを自ら始めねば、中央の統制から解放されることはないのであろう。熱帯季題の構想が発表された昭和 11 年（1936）に、栗林一石路は「季題の反動性と進歩的本質」にて、日本内地だけに通用する季題が、海外の風土に接したときに生じる矛盾を無理やりに解決しようとして考案された虚子の熱帯季題論について、次のように語っている。

> 年がら年中夏の句以外に作つてはならぬといふ法律は熱帯の人々にとつては非常な苦悩を伴ふ弾圧法でなくてなんであらう。これは全く、自然と人類の生活を無視してたゞ季題といふ意味のない制度を守るためにのみ案出したものゝ否それよりもむしろ植民地を圧迫する帝

国主義的イデオロギーに似てさへゐるのだ[61]。

虚子の熱帯季題と孕江の台湾季題論とを、「郷土」「地方」「外地文学」といったコンテクストに置いて論じれば、日本俳句や虚子の「熱帯季題」論が、郷土主義や地方色に背くといった面や、そのナショナル象徴性が浮かび上がり、戦前の台湾俳句や台湾俳人が立たされた窮地や、日本俳句の枠組みに完全に入り込むことがしえない複雑な状況が、より立体的に浮き彫りになったと言える。しかし、熱帯季題が引き起こした波紋は、台湾俳壇はもちろん、内地（日本）の俳壇にも、季題の本質、海外の季の問題、歳時記、植民地俳句などといったさまざまな面で取り上げて論じられ、良くも悪くも俳句の普遍性と特殊性に気付かせてくれるものとなった。特に、虚子を師と仰いだゆうかり社の俳人は、非常に困難な立場に置かれたであろう。

ただ、台湾俳壇や台湾俳人自身が、内地の俳句大家や『ホトトギス』に頼りすぎたため、自身の風土に根ざした研究に対する努力を怠ってきたことや、日本本土から離れ、海外の環境に接して異質の風土と直面した時、季題志向の俳句よりも実際の季感に基づく句を作るべきであることなど、自省するきっかけともなったのである。そして、地域それぞれの独自性を尊重し、季の持つ地方性こそ俳句の普遍性であるという認識に基づき、山本孕江は、台湾の風物を解説し、俳句作品を紹介する「熱帯圏」の連載を昭和 11（1936）年より『ゆうかり』にて開始した。もちろん、こうした行為にたどりつくまでには、さまざまな試行錯誤や迷い、行き詰まりがあったのは想像に難くない。ただ、台湾では、四季の区別による季分けよりも、季感を主とした句を詠むべきであるとの主張が明らかにされ、虚子の熱帯季題に対し、『ゆうかり』主宰として、台湾俳壇の季に対する態度を示す意思表明が行われたのである。

また、春夏秋冬による季題の分け方ではなく、こうした孕江の台湾季題観は、黄霊芝による『台湾俳句歳時記』に示されるような、「暖かいころ」「暑いころ」「涼しいころ」「寒いころ」などといった、自然と感じる、季節の変化による分け方と通じるものがある。そして、小林李坪の『台湾歳時記』、西岡塘翠の「台湾俳材解説」、山本孕江の「熱帯圏」、黄霊芝の『台湾俳句歳時記』の四つの著作は、俳句が台湾に伝わってから現在に至るまで、各時代の俳人たちの、台湾の「季」に対する代表的な言説であり、それらの比較検討を今後の課題としたい。

〔付記〕
本稿は、2019 年 7 月 6 日、天理大学で開催された「天理台湾学会第 29 回研究大会」における発表をもとに、大幅に加筆・修正を加えたものである。同発表会において、コメンテーターの河原功先生をはじめ、フロアから多くの貴重なコメントや助言をいただいたことについて、ここに感謝の意を示す。なお、本稿は中華民国行政院科技部の研究助成（MOST 107-2410-H-034-008）を受けた研究による成果の一部である。

注
1　沈美雪『明治期台湾俳句界の始原的実像――近代俳句の台湾表象』致良出版社、2014 年、53-84 頁。
2　小林李坪と『台湾歳時記』の詳細については、同上書（127-150 頁）を参照。
3　正しくは小林「里平」であり、「李坪」は本名に因んだ俳号である。「理平・李平」は作者の誤記であると思われる。
4　筑紫磐井「歳時記の百年〔第 6 回〕『臺灣歳時記』」『俳壇』2006 年 6 月号、2000 年、56-59 頁。

5 『台湾総督府職員録』（「台湾総督府職員録系統」2019 年 1 月 17 日閲覧 http://who.ith.sinica.edu.tw/mpView.action）によると、その後の孕江の官職は、大正 11（1922）年に中央研究所庶務課へ異動し、昭和 9（1934）年に「各種委員會　臺灣總督府市區計畫委員會」に委員（陸軍一等主計）として名を連ねるなど、中央研究所内の勤務を中心に仕事をしていたことが分かる。

6 『台湾俳句集』は「ゆうかり叢書」第 1 編として昭和 3（1928）年に出版され、三上武夫（惜字塔）、山本昇（孕江）がそれぞれ編集者と発行人を務めている。また、『ゆうかり俳句集』はゆうかり叢書第 2 編として昭和 10（1935）年に刊行されている。

7 共にホトトギス同人。浜田坡牛（本名・佐賀衛、1892- 未詳）の句は皆吉爽雨編の『ホトトギス同人第二句集』（かに書房、1948 年）にも収録されており、『句集 万岳』（富士編集部、1962 年）や、『最新万葉訓解論』（国書刊行会、1977 年）などの著作がある。浜中柑児（本名・貫始、1885-1964）は『虚子五百句鑑賞 明治の部』（改造社、1941 年）、『虚子と芭蕉』（新樹社、1961 年）などがある。

8 浜田坡牛「旅行断片（二）」『ゆうかり』大正 14 年 2 月号、1925 年、23-26 頁。「旅行断片（三）」『ゆうかり』大正 14 年 3 月号、1925 年、30-34 頁。

9 池内たけしの台湾行は約 2 週間の旅行で、昭和 2（1927）年 4 月 27 日に基隆港に入港した蓬莱丸で来台し、5 月 16 日に台湾を後にした。

10 『山本孕江句集』は俳人山本孕江（昇）の個人句集で、序文は高浜虚子が執筆した。昭和 17 年 11 月に山本孕江句集刊行会より刊行し、大正 8 年から昭和 15 年までの作品から山本孕江 自選の 646 句を収録。

11 高浜虚子「熱帯季題について」『ホトトギス』昭和 18 年 4 月号、1943 年、17 頁。『山本孕江句集』の序文より抜粋。

12 高浜虚子「消息」『ホトトギス』昭和 22 年 7 月号、1947 年、2 頁。

13 本名は吉治郎で、新聞記者として来台し、「台湾新聞」台北支局長として勤務。『ゆうかり』最初の雑詠選者を務め（創刊～大正 11 年秋）、また、「ゆうかり」という誌名も、夜牛の提案による同人互選の結果に基づき決定されたなど、初期のゆうかり俳壇を支えた俳人の一人である。著書に『あめりか百態』（台湾新聞社、1929 年）、『謎の国・夢の国』（台湾新聞社、1931 年）などがある。

14 山本孕江・佐藤小峰・藤田芳仲「虚子先生をお迎へして」『ゆうかり』昭和 11 年 7 月号、1936 年、12-14 頁。

15 高浜虚子『渡佛日記』改造社、1936 年、340-343 頁。

16 同上書、406 頁。

17 同上書、346-347 頁。

18 筆者が旧論において引用したことのある一文である。沈美雪「俳句の地域性と国際化――台湾俳壇を中心に――」弘前大学地域社会研究科博士号論文、2007 年、204 頁。

19 上ノ畑楠窓（1885-1939）で本名は純一、俳人、明治 18 年大分県生まれ、昭和 14 年没。虚子の乗船した日本郵船、箱根丸の機関長。

20 山本孕江「熱帯俳句と季の問題」『ゆうかり』昭和 11 年 7 月号、1936 年、27 頁。

21 高浜虚子、前掲『渡佛日記』、337-338 頁。

22 高浜虚子「熱帯季題小論補遺」『ホトトギス』昭和 11 年 9 月号、1936 年、1-3 頁。

23 虚子編集の歳時記に昭和 9 年版の『新歳時記』（三省堂）があり、その増訂版に当たる『新歳時記（改訂）』が昭和 15 年に出版され、中には虚子の主張する「熱帯季題」が 35 題ほど収録されている。

24 高浜虚子、前掲「熱帯季題について」、17 頁。

25 沈美雪、前掲『明治期台湾俳句界の始原的実像――近代俳句の台湾表象』。

26 虚子は生涯、数回にわたり満州国や朝鮮の旅に出ているが、孕江がここで言及したのはおそらく、大正 13（1924）年 10 月の朝鮮・満州への旅である。

27 山本孕江「台湾俳句観」『ゆうかり』大正 14 年 1 月号、1925 年、12-14 頁。

28 同上論文。

29 山本みさく「樺太と朝鮮とそして台湾」『ゆうかり』大正 15 年 6 月号、1926 年、19-21 頁。

30 浜田坡牛「台湾俳句研究（二）台湾は俳諧の王国」『ゆうかり』大正 15 年 9 月号、1926 年、6-10 頁。

31 服部海雪「余白を借りて」『ゆうかり』大正 15 年 10 月号、1926 年、34-35 頁。

32 西岡塘翠「台湾作句者の苦悩と私観――季題観やら俳材観やらその他」『ホトトギス』昭和 2 年 8 月号、1927 年、75-78 頁。

33 山本孕江・藤田秀水など「季重なり問答」『ゆうかり』昭和 6 年 5 月号、1931 年、16-20 頁。

34 山本孕江・藤田秀水「台湾と歳時記」『ゆうかり』昭和 6 年 6 月号、1931 年、10-12 頁。

35 荻原井泉水「俳句の立ち上る時」『東京日々新聞』昭和 11 年 4 月 23・24 日。

36 吉岡禪寺洞「再び無季俳句に関して」『俳句研究』昭和 12 年 5 月号、1937 年、98-104 頁。

37　沈美雪、前掲「俳句の地域性と国際化――台湾俳壇を中心に――」、205-207 頁。
38　山本孕江・藤田秀水、前掲「台湾と歳時記」、10-12 頁。孕江は台湾歳時記の出版の問題について「現在本誌に続載中の台湾俳材解説なども、その意味に於て早く完成し整理編纂する必要があろう」と述べている。
39　沈美雪「山本孕江「熱帯圏」考――『ゆうかり』における台湾句と台湾素材の研究――」『天理台湾学報』第 29 号、2020 年、67-84 頁。
40　山本孕江「熱帯圏－（28）－」『ゆうかり』昭和 15 年 7 月号、1940 年、3 頁。
41　二百号記念座談会は昭和 13（1938）年 5 月 6 日、台北の新公園内協和会館で行われた。座談会の様子を記した「ゆうかり二百号記念座談会」は『ゆうかり』昭和 13 年 6 月号に収録されている（6-14 頁）。
42　「亜熱帯」「熱帯」に跨る台湾の地域の特殊性から来る「季」の認定の困難さと複雑性に対する孕江の見解は、沈美雪、前掲「山本孕江「熱帯圏」考――『ゆうかり』における台湾句と台湾素材の研究――」に詳しいので参照されたい。
43　烏秋生「熱帯季題と台湾」『ゆうかり』昭和 12 年 2 月号、1937 年、7-9 頁。
44　烏秋生「烏秋漫語（2）無季俳句」『ゆうかり』昭和 12 年 6 月号、1937 年、10-11 頁。
45　池田重二「ブラジルの俳況」『俳句研究』昭和 12 年 7 月号、1937 年、281-283 頁。
46　烏秋生「烏秋漫語（4）」『ゆうかり』昭和 12 年 8 月号、1937 年、20-21 頁。
47　阿川燕城「台湾に於ける季題のありかた」『俳句研究』昭和 17 年 11 月、1942 年、18-21 頁。
48　王碧蕉については沈美雪「「本島人」俳句作家としての王碧蕉（I）―『ゆうかり』デビューから昭和 15 年までの足跡―」（『2018 年中国文化大学国際シンポジウム―持続可能な社会のための日本語教育と日本研究を模索して―』会議予稿集、2018 年、150-158 頁）を参照されたい。
49　王碧蕉「俳句の大東亜性」『俳句研究』昭和 18 年 4 月号、1943 年、37-39 頁。
50　熱帯季題の他に、皇室関係（紀元節など）、軍隊関係（入営など）、朝鮮（温突、オンドル）、中国（爆竹）、南方（四迷忌）、極地（北極光）などの季題も削除された。
51　筑紫磐井「虚子の季題論と季題」『国文学 解釈と鑑賞』平成 21 年 11 月号、2009 年、89-97 頁。
52　中島斌雄「三代俳句受難史」『国文学 解釈と鑑賞』昭和 43 年 1 月号、1968 年、65-69 頁。
53　沈美雪「諏訪素濤編俳誌『熱』と本島人俳句作家―大正前期の台湾俳壇と日本俳壇との交流をめぐって―」『淡江日本論叢』第 36 号、2017 年、23-48 頁。
54　ただ、長きにわたり会長を務め、同会と台湾の俳句界をけん引してきた黄霊芝であるが、2016 年 3 月に享年 87 で永眠された。そして、台北俳句会は、新しい会長が就任することなく、黄を永遠の代表者とすることを、会員一同の話し合いにおいて決定した。
55　高橋睦郎・金子兜太・鈴木健一鼎談「季題、季語、そして反季語」『すばる』2004 年 10 月号、2004 年、154-179 頁。
56　村上神洲「台湾の真美」『台湾文芸』明治 35 年 4 月号、1902 年、5-6 頁。
57　小松吉久「植民地文学《台湾趣味の発揮》」『台湾慣習記事』第 5 巻第 10 号、明治 38 年 10 月、1905 年、829-833 頁。
58　沈美雪、前掲『明治期台湾俳句界の始原的実像――近代俳句の台湾表象』、27-52 頁。
59　染井清美「台湾日本語俳句に関する文化史的考察―台北俳句会を中心として―」大阪大学文学研究科博士論文、2014 年、34 頁。
60　今井祥子「近代俳句史の周辺で―台湾と俳句」『立教大学比較文明学紀要 境界を越えて 比較文明学の現在』第 5 号、2005 年、135-157 頁。
61　栗林一石路「季題の反動性と進歩的本質」『俳句研究』昭和 11 年 9 月号、1936 年、83-92 頁。

（2020 年 10 月 14 日投稿受理、2021 年 2 月 20 日採用決定）